様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１０１２

研究課題名（和文）ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの「教養」理念形成と「愛の書簡」

研究課題名（英文）The "culture" idea formation of Wilhelm von Humboldt and the "letter of love"

研究代表者
櫻井　佳樹（SAKURAI, YOSHIKI）

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：８０１８７０９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,900,000円、（間接経費）　570,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、フンボルトが妻カロリーネと交わした「愛の書簡」を研究対象として､彼らの日常的な「愛」の実践と思想が、彼の「教養」理念形成にいかなる影響を与えたのか解明した。
まず当時における「書簡」メディアの果たした役割について明らかにした。「書簡」というメディアを使って、自らの徳を育てようとするブント（育徳同盟）に彼らは参加しながら互いの関係を親密にしていったこと、また書簡は、他者が学びうる学習教材としての価値があるとみなされ、そのため内面や秘密を打ち明けるという苦悩に直面せざるを得なかったことなどが明らかになった。
なお最終年度にはドイツ教育学会の陶冶･教育哲学委員会年次大会で成果発表した。

研究成果の概要（英文）：This research made applicable to research the "letter of love" which Humboldt exchanged with wife Caroline, and practice and thought of everyday "love" of them solved what kind of influence it had on his "culture" idea formation.
First, it clarified about the role which the "letter" media in that time played. It was considered that their having made the relation mutual with participation intimate and a letter had the value as learning materials which the others can study in the morality alliance which is going to raise its virtue using the meidia a "letter", therefore what suffering of revealing an inside and secret had to be faced for became clear.In addition, a result announcement was made to the last fiscal year by the training/ educational philosophy committee annual meeting of the German pedagogy meeting.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学･教育学

キーワード：教育思想

１．研究開始当初の背景

本研究は、「ドイツにおける『教養・人間形成』(Bildung) 概念の成立と展開」という全体構想に位置づけられるものである。ドイツ教育学の基礎概念としての「教養・人間形成」(Bildung) 概念は、およそ 18 世紀末に成立し、多様な概念内容を含意しつつ今日に至っている。「『教養・人間形成』(Bildung) とは何か」という問いは常に繰り返されてきた歴史的な問いであり、同時にアクチュアルな問いでもある。本研究は、その成立に多大な貢献をしたヴィルヘルム・フォン・フンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767-1835）の「教養」理念形成を跡づけることによって、フンボルトが、当時描いた「人間の教養」とは何なのか、を明らかにしようとするものである。

その際、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)が妻カロリーネと交わした「愛の書簡」を研究対象としながら、フンボルトの「教養」概念の特質や内実を明らかにしようとするものである。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとその妻カロリーネとの出会い、婚約から結婚へと関係が深化していくなかで、彼の「教養」理念も進展したと考えられる。「教養」概念を単なる理論の次元で捉えるだけでなく、彼の具体的な生活の次元と交差させることによって、「教養」理念を実態的に捉えようとするものである。

研究代表者は、フンボルトの「教養」理念の形成過程を思想史的、社会史的に研究している。拙論「フンボルトにおける友愛・愛と陶冶の問題」（中国四国教育学会編『教育学研究紀要』（CD-ROM 版）第 51 巻 2005 年）では、青年期フンボルトがベルリン・サロンの主催者ヘンリエッテ・ヘルツ(Henriette Herz, 1764-1847)らと結成した「育徳（美徳）同盟」（Tugendbund)における特異な交友関係を明らかにした。その研究を深化させる目的で、平成 19-21 年度の科学研究費「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『教養』理念形成における社交性の問題」（基盤研究（C）課題番号 19530705）の交付を受けた。そこでは「育徳(美徳)同盟」の思想史的・社会史的背景を「ドイツ啓蒙主義とモーゼス・メンデルスゾーン」（中国四国教育学会編『教育学研究紀要』（CD-ROM 版）第 54 巻　2009 年）に、またヘンリエッテ・ヘルツとの交友関係を「フンボルトとヘンリエッテ・ヘルツ」（第 55 巻）にまとめた。そして「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『教養』理念形成における社交性の問題」と題する研究成果を第 52 回教育哲学会（2009 年 10 月開催、名古屋大学）で発表した。それらを通して、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの「教養」理念の内実において、「他者との結合」「相互作用」などの「社交性」が非常に大きな意味を有していることが明らかになった。しかしながら、カロリーネとの関係については端緒的な研究にとどまっており、必ずしも詳細な研究とまでは言えない状況であった。したがって、本研究はこれまでの研究を継承し発展させるものである。

２．研究の目的

フンボルトは「育徳（美徳）同盟」Tugendbund 内で書簡を通じてカロリーネと知り合った。したがって、第１の課題は当時における「書簡」メディアの果たした役割について明らかにすることである。フンボルト夫妻は全７巻の膨大な書簡を遺している。二人にとって「書簡」がどういう役割を果たしていたのか。また「育徳（美徳）同盟」においてどのような役割を果たしたのか。書簡は心の内面を打ち明けるという「秘密」の「共有」によって「親密化」を促進する機能と同時に、文字に残されたテキストを第三者が読むことによって暴露されるという「公開性」を有する独特のメディアである。またルソーの『新エロイーズ』やゲーテの『若きウェルテルの悩み』など書簡形式を用いた小説が一世を風靡した時代である。フンボルトとカロリーネは、そうした小説を投影して書簡を書いたと思われる。疾風怒濤文学時代やロマン主義時代における書簡形式が、フンボルトとカロリーネの関係ならびに「教養」理念形成に果たした役割について明らかにする。

第２の課題は、フンボルトがカロリーネとの出会いから、婚約そして結婚へと形が変化していく中で、すなわち関係が友愛から愛へと深化していくなかで、彼の「教養」理念がいかに進展したのか、書簡を丁寧に跡づけることによって、彼らの「愛」の体験が彼の初期の著作に対してどのような影響を与えたのかを解明していくことである。

フンボルトとカロリーネとの関係からフンボルトは、男女の性差に関する問題意識を発展させ、比較人類学研究へと向かっていった。したがって、第３の課題は、男女の違いというフンボルトの類型研究に対して、フンボルトの自己自身や妻に対する性格理解がどう反映したのか、明らかにすることである。つまりカロリーネ個人の特性と女性性一般の性質を比べることである。

３．研究の方法

フンボルトやその他「育徳（美徳）同盟」に関わる人物の書簡や二次文献をドイツ国内はもとより日本においても収集し、それらを精読するという文献研究の手法によって行った。なお、研究代表者は、フンボルトの「教養」理念の形成過程を思想史的・社会史的にアプローチした。出来上がった彼の理論や業績を表面的に理解するだけでは、その真の意味内容に達しないと考えるからである。

４．研究成果

主として第１の課題、第２の課題に対応するものとして、論文「ヴィルヘルム・フォン・

フンボルトとドイツ書簡文化」を執筆した。
まず「書簡の世紀」と呼ばれた 18 世紀のドイツ書簡文化の歴史上の位置づけを明らかにした。
デュルメンは、啓蒙主義時代の書簡文化の特徴（根本的変化）を以下の５つにまとめている。①新しい文通は、基本的に母語であるドイツ語で書かれた。②クリスティアン・ゲラート『よいドイツ語手紙について』(1742 年)の影響の下、自然な言語で書かれている。③書き手の範囲、話題の範囲が拡大した。④身分の壁が打ち破られ、市民と貴族の社会的境界線が通行可能となった。⑤女性が初めて知的な相手としてまじめに受け入れられた、と。また彼は、啓蒙主義の書簡文化の３つの際立った特徴を挙げている。第一にこの書簡文化は、報告、思想の交換などの並外れて強い欲求から生まれたこと。文学創作、新刊本の批評、時代の一般的問題、自己表現、自己確認への欲求である。第二に啓蒙主義の書簡は、その主観性が際立った特徴であること。「書き手は自分の精神状態と内面的な経験や確信、いや個人の問題を深いところまで見せてくれる」と。第三に共同で真理に近づくために意見を交換する討論である。つまり友人との日常の接触が、相互にとって啓蒙となり、自己実現に近づく方途と見なされたのである。こうして、書簡を書くために啓蒙主義者たちは、多くの時間とお金を使ったという。今日おびただしい量の書簡が残されているが、フォルスターの往復書簡は 1260 通、その受取人は約 75 人であった。ニコライには 2500 人の書き手から送られてきた書簡が残され、その話題も、文学、哲学、美術、教育学、宗教体験、道徳感情、新刊書、人間、愛すべき同胞、同時代人についてなど様々であった。またこれらは、受取人だけが読んだのではなく、友人や家族に公開していたし、またそれを前提に書いていたという。あるいは、ゲラート、グライム、ゲーテの例は、始めから公衆への公開を、すなわち印刷を予定していたという。このように書簡が啓蒙された人々をつなぐ貴重なメディアとして、情報や意見や魂の交流を可能にしていたのである。
ハーバーマスによれば、ゲラートに負う当時の流行語で言えば、書簡は「魂の生き写し」であり、「魂の訪れ」と見なされた。「手紙は熱い胸の血で書かれ、涙ながらに読まれるものでなければならなかった」と。これはドイツでは、元来ピエティズムによって、世俗化された感傷性の形式として開拓されてきたが、書簡を通して、相手の自我の心のそよぎへの好奇的または共感的な関係を取り結ぶと共に、自己自身との関係を二重に生起させるものでもあった。日記は、発送者あての書簡となり、自己について語ることは、見知らぬ受信者あてのモノローグとなる。ハーバーマスによれば、書簡も日記も、小家族的に親密な人間関係の中で発見された主体性の実験なのである。すなわち、小家族的親密さの圏内で、私人たちは経済活動という私生活圏から独立し、相互に「純粋に人間的な」関係に入りうる人間たちとして自己を理解するのである。１８世紀が書簡の世紀となったのは偶然ではない。個人は書簡を書きながら、自己をその主体性において展開するからである。
小家族的親密圏が、フマニテート圏として自由と愛と教養という理念を生起する条件であることをフンボルトは、次第に認識してきた。彼は、近代という引き裂かれざるを得ない時代の中で、なお調和的な人間全体として生きる道を模索したのである。
ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、1780 年代後半、ドイツ（ベルリン）啓蒙主義者の薫陶を受けると共に、ユダヤ人女性ヘンリエッテ・ヘルツを中心に形成された秘密組織育徳同盟 Tugendbund のメンバーに迎え入れられた。そこでフンボルトは、後に彼の妻となるカロリーネ・フォン・ダッヘレーデンと書面の上で知り合うことになったのである。1907-18 年に孫のアンナ・フォン・ジドウ(Anna von Sydow)が書簡集７巻本を出版したが、その時点で婚約時(1789 年 12 月 16 日)までに現存した 15 通の書簡を第一部「育徳同盟時代」として第１巻に掲載している。
ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、ヘンリエッテ・ヘルツを通して、育徳同盟に参加した。カロリーネ・フォン・ダッヘレーデンは、カール・フォン・ラロッシュを通して同盟に参加した。このように同盟は共通の知人の紹介を通して参加者を増やしたのであり、二人の書簡交換は、実際に出会う前から始まったものである。またこの同盟は、兄弟姉妹のような関係を形成することが目的であったため、カロリーネからの第１書簡(1788 年 7 月 28 日早朝)は、最初からドゥー(Du)で呼びかけられている。
ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、この時代ゲッティンゲン大学の法学部生であり、そこから、親元に暮らすカロリーネに書簡を送っていることがわかる。1788 年 8 月にダッヘレーデン家の夏の居住地ブルクエルナーにてヴィルヘルムがカロリーネと出会った後、1789 年 1 月のクリスマス休暇に２度目の再会を果たしている。
フンボルトとカロリーネは、同盟のメンバー間の親睦を図り、同盟の目的（人間知、道徳的陶冶）を実現するためにより親密になっていった。鉄道がまだ開通しておらず、電話もない時代において、ゲッティンゲンとエアフルトの二人の交流を可能にする唯一の手段として書簡が果たす意味は大きかった。
したがって二人の書簡を介する交際（コミュニケーション）は、時間と空間による隔たりという障害によって性格づけられた。エアフルトにおいて孤独を感じていたカロリーネにとって、この育徳同盟への参加、フンボルトとの交際は大きな喜びであった。カロリーネは、書簡交換を通して、徐々に自己を開

示しながら、相互の本質の「一致」を見いだしていく。そのことを「享受」（喜び、味わう）(Genuß)するのである。第 10 書簡（1789 年 1 月 29 日)では次のように述べている。「大切なヴィルヘルム、あなたの親愛なる手紙に心からの感謝を捧げます。どんなに喜んで、私はあなたの魂(Seele)を読み、あなたの思考や感受性の過程にしたがったことでしょう。私たちの表象の仕方がしばしば交わり、多くの事柄についていかに類似して考えているのかを知って驚いています。そしてそれはいずれにせよ美しい発見です。そしてとてもよく思うのですが、私たちの本質のこの一致は、私の本質にとって甘い享受なのです」と。このように書簡を読むことによって、相手の内面（魂）を知ることを通して、自己の本質をも理解するとともに、未知なる関係を親密な関係へと変化させたのである。

第６書簡(1789 年 1 月 2 日)において、フンボルトは、５ヶ月ぶりに再会する旅の途上でエアフルトから発信している。「我々自身の陶冶だけが、重要である。たとえそれだけが我々を幸せにしなくとも、それはすべての幸せの最初の条件である。我々の外の世界の流れが、我々の願望と一致しなくとも、我々にはまだ我々の中の世界がある。我々が享受した喜びへの記憶がある。悲喜こもごものすべての事態と同様に、我々を現にある我々にするのに貢献した意識がある。そして最後に運命が今我々を縛り付ける一連の状況をも、新しい活動を通して我々や他者にとって新たな善へと利用する力がある」。ここに彼のその後の「教養/陶冶」(Bildung)理念へ向かう端緒が垣間見える。外的世界がどうであれ、我々の内なる世界、すなわち記憶、意識、力によって再構成できることが幸福に至る道である。その我々自身の内なる世界を形成する（陶冶する）ことが最初の条件なのだと。

以上のように「愛の書簡」を通して、フンボルトは、自己の「教養」理念を形成したことが明らかとなった。

なお最終年度の 2013 年９月 25～27 日にドイツ連邦共和国・ヴィッテンベルク大学で開催されたドイツ教育学会の陶冶・教育哲学委員会の 2013 年度年次大会に参加し、「Zur Entstehung des Begriffs der Bildung in Deutschland und Japan」（邦訳「日独におけるビルドゥング(Bildung/教養)概念の成立について」）と題する成果発表を行った。フンボルトの Bildug 理念の成立過程における社交性の問題、並びに「大正教養主義」を中心に、日本におけるビルドゥング（教養）概念の成立を扱うことにより、日独のビルドゥング概念の成立過程の比較を行ったものである。前半では、「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトのビルドゥング(Bildung) 理念の成立過程における社交性について」扱った。フンボルトが参加した「育徳同盟」は書簡を、それによって人が他者と彼の個性を交換することを可能にするメディアとみなし重視したこと、つまり書簡が、「個人化の社会性」を形成しうるメディアとして機能したことを指摘した。育徳同盟は１８世紀における小さな書簡交換ネットワークであったといえる。一方、後半では日本においていつ、いかにビルドゥング概念が受容されたのか、成立したのかについて考察し、大正教養主義の代表的知識人である和辻哲郎や阿部次郎等を取り上げた。そこでは阿部次郎の『三太郎の日記』(1914)に代表されるように、「書簡」というより、「日記」という様式が、読者である若者の自己形成（教養）を促した点に特徴があることを指摘した。最後に両概念の成立過程の比較を行い、ドイツのビルドゥング概念も教養という言葉も、若き知識人が自己完成の探求の途上で成立したこと、ドイツでも日本でも啓蒙主義ないし文明がビルドゥングに先行したこと、つまりビルドゥングの思想は、啓蒙主義への反対運動として成立した、ことなどを明らかにした。

この研究成果は本研究課題を含みながら、日独の比較研究を行うという発展部分を含んだものになっている。しかしそれを通して、「ドイツにおける『教養・人間形成』(Bildung)概念の成立と展開」の一端として日本におけるビルドゥング概念の成立があることが跡づけられたし、18 世紀ドイツにおけるその成立過程の特色も示すことが出来た。質疑応答を含むドイツ語による 90 分間の発表を成功させたことは、研究者として大きな自信をもたらしたものであり、またドイツ人研究者との研究交流の進展に繋がるチャンスをいただいたものである。日本学術振興会をはじめ関係各位に謝意を表するとともに、今後ともさらに研究を発展させ、残された研究課題を果たしていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

①<u>櫻井佳樹</u>「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとドイツ書簡文化」　中国四国教育学会『教育学研究紀要』(CD-ROM 版)　査読無　第 58 巻　2013 年　303-308 頁

②<u>櫻井佳樹</u>　「『教育批判の思想史的根拠』を問うことの意味」教育思想史学会『近代教育フォーラム』　査読有　第 20 号　2011 年 161-170 頁

〔学会発表〕（計　５件）

①<u>櫻井佳樹</u>「日独におけるビルドゥング（Bildung/教養）概念の成立について」　マナー研究会　2014 年 2 月 28 日　京都大学

②<u>櫻井佳樹</u>　「Zur Entstehung des Begriffs der Bildung in Deutschland und Japan[邦訳名：日独におけるビルドゥング(Bildung/教養)概念の成立について]　ドイツ教育学

会・陶冶・教育哲学委員会年次大会　2013 年９月 27 日　ドイツ連邦共和国・ヴィッテンベルク大学
③櫻井佳樹　「男女交際のマナー～その歴史的位相」　マナー研究会　2013 年 2 月 27 日　京都大学
④櫻井佳樹　「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとドイツ書簡文化」　中国四国教育学会第 64 回大会、2012 年 11 月 11 日　山口大学
⑤櫻井佳樹　「近代西洋社会におけるマナーと社交性」　マナー研究会　2012 年 2 月 26 日　京都大学

〔図書〕（計　２件）
①矢野智司『マナーと作法の人間学』（仮題）東信堂 2014 年予定　183 頁（共著 34-67 頁）
②小笠原道雄・田代尚弘・堺正之『道徳教育の可能性』　福村出版　2012 年　273 頁（共著 145-154 頁）

６．研究組織
(1)研究代表者
櫻井　佳樹　（ SAKURAI YOSHIKI ）
香川大学･教育学部･教授
研究者番号：80187096